

〔2〕 教える前に

1. 授業を始める前に

日本語を教える場合には、教える場所、テープレコーダーなどの教具のこと、教える内容のことなど、実にさまざまな面で、細心の準備をしておかなければならない。たとえば、教室があり、教科書がそろっていたとしても、それだけで教えることができるわけではない。毎日の授業の前にどれだけの準備がしてあるかが、授業を円滑に進める上での鍵となる。一時間の授業をするためには、その何倍もの準備時間が必要である。

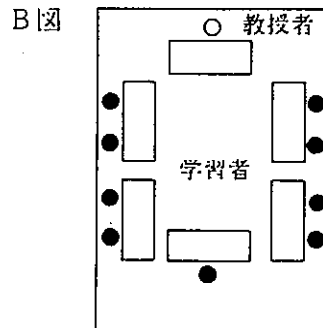
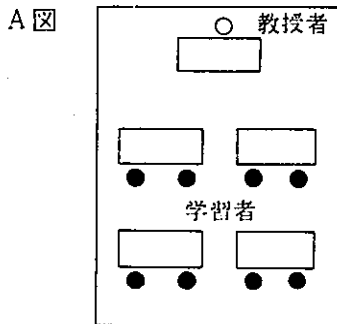
1-1 日本語教室を開く前の準備

(1) 教室の確保

教室は、必ずしも学校のように黒板があって、机が並んでいる部屋を用意しなければならないわけではない。むしろ、生活に密着した言葉を教えるためには、普通の家の居間などの方がよいこともある。例えば、「いただきます」という表現を教えるのには、目の前にお菓子やお茶などがあって、それを使って練習をするのが一番よいが、それには、いわゆる教室よりも居間の方が、より適切である。しかし、黒板は用意しにくいだろうから、わら半紙でもなんでも大型の紙が用意できればよい。

ただし、学習者にとっては、いかにも勉強しているという雰囲気があることも大切なので、場所と時間は固定しておいた方がよい。

学校のような教室が用意できる場合は、A図のように教授者が一方的に学習者に教えるというような机の配置よりも、B図の配置の方が使いやすい。なぜなら、日本語を教えるときは、なるべく、教授者と学習者、あるいは学習者同士が自然に会話をしている感じにすることが大切だからである。



(2) 学習者の調査

日本語教室を開く前に、事前にどのような学習者が来るのかを調べておくことは是非とも必要である。どのような家族構成なのか、どのような所に住んでいるのか、どういう仕事をしたいと思っているかなどについて、身元引受人や生活指導員に連絡をとって、どのような細かいことでもいいから情報をとっておくようにしたい。

日本語を教え始めて困ることの一つは、コースがある程度進んでから、新しい学習者が入ってくることである。こうした可能性がどの程度あるかも、前もって分かる範囲で調べておきたい。(帰国者の中には、後に家族を呼び寄せる可能性がかなりある。)

(3) 学習コースの計画

少なくとも「生活日本語」を何か月で教えるかという計画を作っておかなければならない。1週間に何時間教えるかで異なるが、1日2時間、週5日として、24週(総計240時間)程度を標準と考えてほしい。ただし、進度は学習者の能力、環境によって違うものなので、これは一応の標準にすぎない。

コースの計画は、なるべく早めに学習者に示すのが望ましい。

(4) 教具の準備

この教科書は、学習者が自学自習することもできるように、中国語訳を付けたテープが用意してある。また、教室の中でもテープを利用するので、テープレコーダーはどうしても用意しなければならない。テープレコーダーは、多様な機能を持ったものが市販されているので、用意したテープレコーダーは、どのように使うのか前もって動かしてみて、調べておくべきである。

そのほか、各課で使う教具については、各課ごとの「(2) 準備」に説明があるので、そこを参照されたい。

1-2 実際に授業を行うための準備

(1) 応用会話テープの作成

「生活日本語」の各課の会話文は、帰国者が出会うであろう場面の典型的な会話を選んでのせてある。しかし、個々の学習者がその場面で実際に会う会話は、必ずしも教科書の会話と同じものではない。例えば、市役所と言えば、ある学習者が実際に行く市役所(役場)では、外国人登録の窓口は、教科書にある「5番」ではなく、「1番」かもしれない。また、ある特定の学習者の場合には、教科書にのっている会話以外にも、どうしても必要な会話があるかもしれない。そういう会話は、教科書に付属して

いるテープのほかに、応用会話として別に作り、学習者に渡しておくといよい。

教科書は、この「生活日本語」に限らず、一般に不特定の学習者を考えて作ってある。それを特定の学習者のために、少しずつ変更を加えながら使っていくのは、教授者の仕事であろう。

(2) 教案作成上の注意

毎日の授業の前に、その日の授業計画（教案）を作っておくことが望ましい。日本語の授業は、教科書にあるとおりの順序で、〔会話—1〕から〔会話—2〕〔会話—3〕〔会話—4〕の順で行い、次に練習を行うというようにやってもうまくいくものではない。どのような順で行うかについては、各課の「2. 学習項目とその扱い方」を参照してほしいが、それも、一つの例でしかない。個々の学習者の反応を見ながら、練習の順序などは変更した方がよい。そのためには、教科書を自分のクラス用に組みかえた計画を作る必要がある。

教案は、各学習項目の内容、それに使う時間など、なるべく細かく立てる方がよいが、実際の授業はむしろ、それにあまり縛られないようにしたい。計画はあくまで計画で、授業を無理にその計画にのせようとする、授業の自然な流れを壊してしまうことになる。学習者が喜んで練習をし、発話をしているのに、それを無理に押しとどめて、計画に合わせるようなことは慎みたい。

2. 授業を行う際の注意

- (1) 日本語の授業では、学習者になるべく多く発話させることが大切である。教授者の発話を繰り返させるのもよいし、質問に答えさせるのもよいが、とにかくたくさん日本語を話させることが必要である。教授者がいくらうまく説明しても、本を読ませても、それだけでは日本語が話せるようにはならない。なによりも学習者に発話させ、使わせることが大切である。
- (2) 中国語ができる教授者は、どうしても中国語を使った説明が多くなりやすい。中国語による説明は、必要最小限にとどめ、少なくとも練習を行う際には、日本語だけでやらなければならない。
- (3) 日本語の発音、動詞の活用の変化、長い文の暗記などは、どんな学習者でも難しい。一回でできるようにすることは考えず、毎日少しずつ練習させるとよい。
- (4) 発音の練習などで、なかなかうまくできないようにならない学習者がいる。一回の練習は短い時間にとどめて、その最後に必ずほめてやるようにしたい。毎日の練習の中

で、少しでもよくなった点を見つけて、そこをほめてやることが大切である。

- (5) 言葉の勉強は、学校の授業のように堅苦しい雰囲気のところではなかなかうまくいかない。だれでも自由に話ができるように、教授者も学習者もリラックスすることが大切である。
- (6) 学習者にとっては、教室の中で勉強したことが、外で日本人と話すときに使えたという経験がなによりも励みになる。そのためにも、普段からだれとでも恐れずに日本語を話す習慣を身に付けさせたい。
- (7) 間違えてもよいから、日本語をどんどん使うようにさせることが大切である。教授者は、誤りを直してやらなければならないが、直し過ぎて学習者の発話意欲を失わせる結果にならないようにしたい。
- (8) 学習者を日本語に慣れさせるために、内容が難しくても半分以上分からなくても、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などを見たり読んだりすることを勧めるとよい。テレビは言葉が分からなくても、画面を見ているだけで、日本の生活習慣を覚えるのに役立つであろう。
- (9) 日本語の授業で最も大切でしかも最も難しいのは、学習者が言いたいと思っていることを教授者は的確に把握しなければならない。何か質問をしたいとき、教授者の教えたことで分からないことがあるとき、学習者は、日本語がよくできないために非常にもどかしい思いをしているはずである。その言いたいことをしっかり把握して、授業の中に組み込んでいけるようになったとき、日本語の教授者としては一人前になったと言えよう。そのためには、教授者は学習者の反応を、言葉だけではなく、表情、しぐさから息遣いに至るまで細かく観察していることが大切である。こうした学習者の反応が敏感に体で感じられ、学習者がなぜ困っているかが分かって初めて、日本語がしっかり教えられるようになるものである。

3. 言葉の指導と生活の指導

「生活日本語」は、日常生活の場面を題材に作ってあるので、それを教えることによって、必要最小限の生活指導ができるようになっていく。しかし、生活指導が必要な項目は、学習者一人一人違うはずなので、もし、この教科書に入っていない場面があれば、その場面を使って日本語を教えるための教材を作してほしい。

言葉を覚える最善の方法は、それを使うことである。しかも、できるだけ体を動かしながら使っていくことである。その意味で、言葉の学習は技術の習得に最も近い。

職業訓練の場合、基礎的な理論は教室内でやるが、実際に重要なのは、具体的に機械を動かして体で覚えていくことである。学習者が、どうしても日本語を使わなければならない場面というものが、ちょうど、職業訓練における機械を使つての実習に当たる。

そこで、生活指導は、なるべくそのときに使う日本語と関連させて学習できるようにしてやりたい。例えば、帰国直後の学習者にとっては、この教科書には入っていないが、日本の衣服に関する習慣についての指導が必要になるかもしれない。その場合に、着るべき物を用意し、実際に着せてみながら「着る」「脱ぐ」「ボタンをかける」「アイロンをかける」「洗濯をする」などの言葉を導入していきたい。言葉は、実際の行動に結び付いていなければ意味がないことを、常に頭の中に入れておいてほしい。

4. 授業の後で

4-1 毎日の授業の後で

(1) 学習者からの質問への対応

教室で、学習者から特殊な質問や即座に答えることが難しい質問がでて、授業中に対応できないことがある。一人の質問に時間をとられすぎると、ほかの学習者が飽きてしまったりして、授業全体のバランスを崩すことになる。その場合は、授業が終わってから個別に対応しなければならない。

また、学習者の一人がある問題ができず、どうしても授業中に解決してやれなかった場合も、授業が終わってから説明するようにした方がよい。

学習者の疑問点や問題点は、必ずその日のうちに処理しておきたい。そうしなければ、学習者に不満がたまって、フラストレーションを起こすことになる。

(2) 雑談

授業が終わった後や、休み時間などに、日本語で雑談をすることは重要なことである。学習者が、日ごろ困っていること、関心があることを雑談の中から情報として得ておくと、授業で練習をするときに、材料として使えるので非常に助かる。特に必要がなくても、学習者に日本語で気軽に声を掛けてやる習慣を付けておくとよい。ただし、雑談と授業との区別ははっきりつけなければならない。授業の中でも雑談が続いて日本語の学習がおろそかになるようでは困る。

(3) 記録

先に、授業をする前に教案を立てることについて述べたが、授業が終わった後で、

その教案をどの程度こなすことができたか、その記録をとっておくことが必要である。

授業の記録は、クラス全体のものと、学習者個人別のものを作っておくとよい。学習者個人の記録は、ちょうど医者が患者のカルテを作るようなもので、その学習者の進歩の度合や問題点が一目で分かるようにしておきたい。その学習者が日本語の学習を終えて、職業訓練校に入ったり、仕事に就いたりするときに、受入先の責任者に渡せると理想的である。

4—2 社会適応への手引

中国帰国者のように、常に生活との関連を考慮して教えなければならない学習者が対象であるときには、日本語教授者は単に日本語を教えるだけでなく、日本語学習後の進路指導なども行わなければならないことが多い。おそらく学習者にとっては、どの程度日本語が上手になれば仕事ができるかということが最大の関心事のはずである。日本語の指導は、そこで常に将来の就職との関連で考えていなければならない。また、場合によっては、学習者の日本語能力に見合った職業を考えておくことが必要になることもある。

もし学習者が何らかの職業に就くことが決まり、その仕事をしていく際に必要な日本語が、この教科書の中に入っていないならば、その言葉について、個別に指導してやれるとよい。例えば、ある学習者がアルバイトで、中華料理店のウェイトレスの仕事を始めるとしたら、ウェイトレスにとって必要最小限の日本語が何であるかを調べて教えてやれば、仕事を始めるときの不安がかなり軽減されるはずである。